

ヒロイツク・ヒーロー

伊藤帆乃香

「何なんだよ！いっちょ前に泣く資格なんてねえんだよ！お前みたいな化物には！！とつとと地獄に堕ちろ！！」

薄目を開けると白い光がカーテンから微かに漏れていた。アラーム消音のボタンを消すと、しんとした静けさが残った。幼い頃見たアニメの台詞だ。主人公の少年が、ずっと追いついてきた親の仇が同じ年の親友でライバルの少年だと知って混乱するシーン。この後確か相手の少年と全力で戦って勝って、その後で何であいつがと号泣するのだ。子供向けの勧善懲悪アニメ。悪役の勝利など有り得ない。何故同じ年の設定にしたのか疑問に思うほどの憎まれ役のまま、彼は死んだ。中学生くらいの子供が悪になり切れるはずもないのに、その心中は完全無視だった。そんなリアリティなど求めるべきではないのかもしれないけれど、でも絵は良かったし声優も大物を使っていたから、リアルな迫力はあった。台詞もなかなか凄みがあつて良い、と思う。お陰で一人暮らしを始めてから毎日、この台詞のアラームだけで起きることが出来ている。

夏休みが終わってしまった。少年は制服に着替え、しんとした部屋でじつとこちらを伺っている時計を見やる。見てしまつてから、もう彼女とあの駅で待ち合わせをしてはいないのだと思ひ出した。いつもの癖で、ついこの時間に家を出てしまう。玄関を出るとポストに手紙が入っていたので、無造作に手に取って鞆に仕舞った。後で電車で読めば良いだろう。マシヨンのエレベーターを待っていると、太陽の真下に富士山が見えた。青春の青だ。淡いノスタルジーに酔うようにして、朝の慌しい空気で呼吸をした。

「光輝は、死んだ姉さんに似て優しい子だから。酷いことをされたからこそ、それと同じ痛みを相手に味わわせたくないんだよね。」

「ごめん、おばさん…。」

物心ついた時から「おばさん」と二人だった。少年の母親の妹だという。彼女は仕事で忙しかつたから、夜しか会うことはなかったのだけれど。それでも何か不満を感じたことはない。毎晩絵本を読んでくれる時間が好きだった。絵本の内容はあまり覚えていないけれど、おばさんの温もりは少年の心の奥にいつもあった。周りの子供たちは、しよっちゅうおばさんのことを行き遅れだとか負け組だとか言つて、少年に石を投げてきた。もう三十五を過ぎているのに結婚もしないで血の繋がらない子を育てる女。彼女に育てられている少年は、いじめたい盛りの子供たちの格好の的だったのだろう。

やがて大きくなつて学童に通わなくなると、テレビや漫画で時間を潰すことが多くなるのは兄弟のない子供の常だ。少年はいつも悪役に感情移入した。戦隊もののごっこ遊びをする度いつも押し付けられる敵役。実際、自分がその世界に行つたとしてもきつとヒーローではなく悪役だろうと少年は思つていた。本当に小さい頃から、無意識にそんな気がしていた

のだ。いつからか、自ら敵役を勝って出るようにさえなった。周囲にはただ悪ぶりたいだけだろうと馬鹿にされたけれど。

少年は本当によく馬鹿にされる子供だった。全く面白みのない子だったからだろう。おばさん以外に褒められた記憶は数えるほどしかない。今でも何の取り柄もないが、絵を描くことだけはずっと好きだ。自分でも同級生の中では上手い方だったと思っっている。小さい頃の絵本の影響だろうか。それは定かではないが。

おばさんにこれ以上迷惑をかけたくはない。そう思った少年は、必死で勉強して高校に特待生入学をした。といっても無名の学校で、特待生制度もおそらくある程度の進学実績を確保するためのものだ。

「学費なら出したのに。成績を維持するのも大変なんでしょう？わざわざそんな辛いところに飛び込まなくて。」

「大丈夫だよ。おばさん、今まで迷惑かけてごめん。これから僕いないし、自分のために生きて。」

おばさんは大きく目を見開いて、少年の手を握った。

「あんたが良い子に育ってくれて本当に良かった。…あのね、光輝。あんたの本当のお母さん、生きていれば今埼玉あたりに住んでいると思うわ。騙っていてごめんね。」

今まで死んだと思いついていた母。今更だ。何の記憶もない彼女より、おばさんを実の母のように慕ってきた。会いたいとは、思わなかった。

高校生になった少年は、美術部に入学した。幽霊部員だらけの美術部にはいつて毎日美術室に通い、数打てば当たるとばかりにたくさんのコンクールに作品を応募した。しかし結果は一向に付いて来ない。少年は焦った。彼にとつて絵は自らの人間として生きる意味であると同時に、動物として生きる原動力となっていた。

少年が少女と出会ったのはそんなとき。二年生になったばかりの、四月のことだった。

「落ちましたよ。」

朝日に照らされて眩しいくらいに明るい朝の電車の中。小声で告げて、さつき彼女の鞆からふるい落とされた熊のマスコットを差し出す。

「放っておいてくれてよかったのに。」

帰ってきたのは当たり前前に期待していた感謝の言葉ではなかった。目の前の少女の目は憂いを帯びていて、まるで何かを拒んでいるかのようだ。それでもその姿は、人を翻弄するために生まれた女神のような美しさをしていた。少なくとも少年の目にはそう映った。少年は戸惑いながらも、マスコットを少女の胸に押し付けた。そのまま目も合わせずに鳴り止まない鼓動を聞いていたら、いつの間にか少女の姿はなく。少年はその日の授業中、何度もその光景を反芻したが、その度に通り過ぎた雲の色を思い出すようなもどかしさに襲われた。

それから数日かけ、少年は少女を見つけた駅に三十分近く居座って、彼女がいつも使っている電車と車両の見当をつけた。忍者の本領発揮といったところだろうか。そして何食わぬ顔をして、自分もその電車で通学するようになったのだ。手が触れ合いそうな距離で、なるべく目を合わせないように。そんなスリリングな時間に心を踊らせる。始業時間までに一時間も余裕が出来てしまったが、それすら気にはならなかった。

ある時、座る彼女の前で吊革に捕まりながら立つ機会があった。後ろから朝日を浴びた彼女はとても綺麗で。

「前に一度、お会いしたことありました？」

少女は困ったように笑った。その笑顔を見た途端、少年の身体に電流が走った。電車が最寄りの駅に着いた途端、挨拶もそこそこに少年は学校まで走った。上履きも履かずに美術室の扉を勢い良く開ける。画材を掻き集めて、文字通りキャンバスを塗りたくった。様子を見ていた美術の教師が芸術家だねえ、と呟くのが妙に遠くで聞こえた。

「お母さん、僕は翔って名前じゃないよ。光輝だよ。」

母の目が二倍くらいに大きくなり、顔が真っ赤に染まった。記憶にないはずなのに、なぜかはつきりと自分の母だとわかった。彼女は獣のように四つん這いになり、気が狂ったように真っ赤なペンキでフローリングの床を塗りたくり始めた。物語に出てくる鬼みたいだ、と少年は思った。村人と仲良くなりたいのに、恐れられてしまう赤鬼。その友達の青鬼が悪者のふりをし、赤鬼がやつつけるふりをするので、ようやく赤鬼は村人と仲良くなれたのだ。悪役が完全な悪ではないことに気付かされたのはあれが最初だったかもしれない。傍で母が呻くような声をあげる。

「お前が腹の中にいたせいで、私は翔を助けられなかった！身重じゃなきゃ、泳ぎは得意だったのに……。海で翔が知らない子供を助けて溺れてるのを、黙って見ていることしか出来なかった！」

翔：父親だろうか、それとも兄か？恐怖からか感動からか、少年は突っ立ったままで涙を流していた。母親も泣いていた。

「いっちょ前に泣く資格なんてねえんだよ！私たちがみたいな化物には！！あの時死ねば良かったんだ！！」

「君、もうすぐ一時間目が始まるよ。」

美術の教師の声にはつとずる。目の前のキャンバスには、大粒の涙を流し鬼のように真っ赤な顔をした女がいた。背景には燃え盛る炎が描かれている。その宗教的な受難のような光景に、少年は思わず身震いした。

まだ電車の中は冷房がついているけれど、窓から入り込む朝日は夏ほど眩しくはない。あの時の絵は、五月に行われた全国級のの絵画コンクールで入賞したのだった。あれからまだ

半年にもならないのに、もう一年も前のことのように感じる。

少年は運良く電車の座席を確保すると、鞆に仕舞っていた手紙を開けた。そこには一枚の写真と、控え目な柄のメモ用紙が入っていた。青い水が流れる灯明の写真。何だか既視感を覚えつつメモ用紙を開いて、少年は大きく目を見開いた。

「あの子の机に大切に飾ってあった写真です。裏を見たら貴方への詩が書いてあるのを見つけたので。こちらに引越して来てから塞ぎがちだったあの子がこの景色の中ではにっこり笑って、これを見るために引越したのかもしれない、なんて言っていたのよ。私が言うことではないけれど、これからもあの子を忘れないでね。あの子の母より」

写真の裏を見ると、そこには儂げな文字で何か綴られていた。

「これは彼と過ごした日々の記憶。ひとつひとつの思い出。いつかは流れていってしまいうけれど、残した光は私の心に留まるの。彼にとってもそうだと良いのだけれど……」

追記。私、賭けに出ることにした。光なんて不確かなものじゃ、満足なんて出来ない。彼が私を愛していればきっと助けに来てくれる。絶対。彼は私のヒーローだもの。もう何も怖くないわ。」

少年には、自分が描いた絵の意味は分からなかった。ただ、もう彼女と会うわけにはいかないと思った。あの衝動を自分に与えた彼女が、とても怖かった。

それから数日経ったある日。いつもより一時間遅くホームにたどり着くと、電車はもう停車していた。これに乗らなければ遅刻する。扉が閉まる瞬間に慌てて走り込むと、背後で人が挟まったような音がした。ごめんなさい、と泣きそうな声をあげたのは、会わないと決めた彼女だった。彼女は少年を見つけると天使の微笑みを浮かべ、握り締めていたらしいメモ帳を彼に差し出した。控えめに書かれたメールアドレスの下には「小野寺史媛」と記されている。媛という字がつくなんて珍しい。

「名前、なんて読むの？」

思わず尋ねる。恐怖を感じていたのが嘘のように優しい感情が胸を満たすのを感じて。目の前の天使は頬を薄紅に染めて歌うように言った。

「おのであやめ。」

少年にとって、このひとつ年下の少女との日々は今まで感じたことがないほど甘美なものだった。彼らは毎日一緒に電車に乗り、お互いに部活がない月曜日には出会った駅の周辺に位置する街で高校生らしく遊んで過ごした。大型ショッピングモールで話題のアイドルのライブや人気漫画の新巻発売イベントを見たり、映画やカラオケへ行ったり。史媛は清楚な見た目とは裏腹に、ネオンサインの輝く外国風の街を好んだ。夜が更ければ、恋人にするように彼にしなだれかかり、首に腕を巻き付ける。カラオケボックスという密室で身体を密着させてくる彼女が何を求めているのか、彼は気づいていた。だが、気付かぬふりをした。

これ以上近づくのは怖い。あの絵の女が脳裏に浮かぶのだ。しかし何度知らん振りをしても、彼女は変わらなかった。まるでそういう関係になれば男は離れていかないと確信している

かのように。大人しい彼女がどうしてそんな思考回路に至ったのかは分からない。両親が離婚して母親に女手ひとつで育てられたとは聞いていたが、

安易に結びつけるべきものではないだろう。彼女は言っていた。

「私ね、昔はもつと気が強かったんだ。勉強もかけっこも一番じゃないと気が済まなかったの。小さい頃はおかげですごく目立ってた。でも、中学に上がってみたら私よりすごい人なんて腐るほどいてさ。それでも皆に忘れられないように、精一杯人のために優しくすることにしたの。私がいなくなっても、皆が私を覚えてくれるように。」

そんな日々は、太陽が一層その力を誇示し人々が生身の姿を露出する夏になるまで続いた。

夏休み前最後の月曜日、少年は史媛と待ち合わせをしていた。コンクールで賞をとった絵を胸に抱いて。学校に飾られていたのを、半年経ってようやく返却されたのだ。少年が美術部所属だと知っていた少女は、それを見たいとせがんだ。初めて他人に認められた絵だ。彼女に見てもらいたくない訳がない。しかし…。

「信じてもらえなくても仕方ない話なんだけど、この絵は描こうと思って描いたものじゃないんだ。ただ、君に出会った直後に衝動的に描きたくなって…。でも君はこんな顔しないと思うし…。やっぱりに気にしなくて大丈夫、ごめん。」

怒らないでね、と前置きしてから絵を見せた。史媛はさして驚きもせずそれを一目見て、言った。

「光輝くんは私を買い被りすぎよ。女の人は誰だって、自分の知らないところでこういう顔をするものなの。たぶん私もそうだわ。」

「そうなの？」

「そうよ、と返すと史媛は愛おしげにその絵を眺めて更に言った。」

「すごく素敵！炎って綺麗よね。火あぶりの刑ってあるじゃない？私、少し憧れちゃうんだ。民衆の目の前で美しい光を発しながら消えていくって、何だか神秘的というか。そんな死に方、今は誰もできないよね。私も実際に死ぬなら、水の力を借りるのが一番ましなのかなと思うけど。」

ネオンの街で見せる悪戯っぽい笑顔で凄まじいことを口走る彼女に度肝を抜かれる。その目には恐ろしい鬼のような要素などひとつもなく、むしろまるで夢を語る子供のような輝きを持っていた。なんだか背筋が寒くなって、少年はこれからは絵のことは忘れようと心に決めた。

夏休みが始まってからしばらく、少年はゲームや漫画に興じるだけの日々を過ごしていた。そんな彼に史媛からメールが届いたのは、八月の初めのことだった。

「今度八月十三日に天川で花火大会があるんだって！もし他に約束している人がいなかったら、一緒に行ってくださいませんか？」

少年は一も二もなく承知した。結局のところ、彼女が繰り広げる恋人ごっこに関しては満更でもないのだ。そういったものに憧れる年頃でもある。彼は読んでいた漫画を本棚に戻し

て、花火大会の詳細をくまなく調べた。

八月十三日の夕方に天川の川辺に現れた彼女は、白いワンピースと黒髪をなびかせて膝を抱えていた。触れたら壊れてしまいそうな華奢な肩にそっと手を置いたのは、彼女の顔が何かを思いつめているかのようになんでいたから。消えてしまいたい、と呟く声が聞こえた気がした。消えるくらいなら壊れてしまった方がまだましだと、肩を強く抱きしめる。彼女は微笑みかけてくれたが、その目に一瞬よぎった闇を少年は見逃さなかった。

「行こうか。」

どこへ。たとえ彼女が心に何か抱えていても、今は何も聞いてはいけない気がした。歩いている間に上がり始めた花火を眺め、その方向へと真っ直ぐに歩いた。金を払って花火を見ているのだから人々が指定席に座って上を見上げているのが視界に入った途端、史媛は少年の袖を引いて歩みを止めた。赤や黄色の光が、まるで絵の具のように彼女の身にまとう白をキャンバスにしている。数秒の間の後、思い切り強く抱きしめられた。一拍遅れて人々の大きな歓声が響く。きつと今、一際大きな花火が上がったのだろう。タイミング悪いな、と思わず苦笑した。

「引越すことになったの。」

どこへ。社交辞令のようにそう聞きそうになって、すぐ我に返る。

「えっ…。」

「母が再婚することになって。義理の父になる人は東京に住んでいたんだけど、今度広島に飛ばされるんだって。だから付いて行って籍を入れるみたい。行きたくないって行っただけど、行かないと住むところも学費もなくなるけど良いのかって言われて。」

頭上の光に照らされて真っ赤に染まった涙が、史媛の頬を滑り落ちてゆく。

まだ出会ってからたったの四ヶ月。これほど短い終わりを誰が予期していただろう。

人の流れがふたりの間を縫っていく。いつの間にか花火は終わっていたようだ。

「今までありがとう。」

史媛はそれだけ言うと、人混みの影に姿を消した。慌てて追いかけたのにどうしても見つからなくて。最初から彼女はいなかったのかもしれない、と少年は思った。夏が見せた夢か幻。この暑さならどこかおかしくなってしまっても不思議ではない。

締め付けられた胸から染み出してきた何かを抑えきれず、少年はその日初めて家の外で夜を明かした。おばさんに明日帰ってもいいかとメールを入れようとして、躊躇った末にやめた。電車で海の傍の駅まで出て、一晩中海沿いを歩いたのだ。家族が死んだのが目の前に広がる太平洋かどうかさえ分からない。涙も一滴も出なかった。朝、辿り着いたアパートのフロントランスに、蟬の死骸が広がっていた。少年はそれを見なかったふりをして自室へ行き、死んだように眠った。少年がいつの間になくしてしまっていた何もかもは、少女に奪われる前にとつくに捨ててしまっていたのかもしれない。

それからわずか一週間。少年の携帯電話が音を発した。発信者は「小野寺史媛」。迷わず

通話ボタンを押すと、掠れた声が小さな機械ごしに伝わってきた。

「久しぶり。」

「史媛？何かあった？」

「絶対に軽蔑しないって約束してくれる？」

「どうした？」

「わたし、私、義理の父の浮気相手になっちゃった。逃げ切れなくて……。もう家に帰れない……！」

「史媛、今どこにいるんだ？」

「近所の公衆トイレ……。今頃ふたりとも私を追いかけているわ。どうしよう、どうしよう！」

「落ち着いて。大丈夫だから。」
大丈夫な確証などないが、広島まで助けに行けるはずもない。何より、頭が電流が流れているように痛い。少年は携帯電話を放り出し、頭を抱えて画用紙と画材の広がったベッドの上になだれ込んだ。画用紙を掴んで、呻きながら何かを描き殴る。

少年の目は、薄暗い公衆トイレを映した。個室の中でひとりの少女がすすり泣き、震えていた。般若の形相をした少女の母らしき女が、天井と個室の戸との僅かな隙間から入り込もうと脚をかけている。その口からは獣のような声が漏れ、目は血走っていた。

「このアマ！お前なんか生むんじゃなかったよ、私の人生の何もかもをめちゃくちゃにしやがって！」

これが史媛の言っていた、本人の知らないところで見せる女の素顔というものなのか。少年の思考はびたりと停止してしまった。ただ呆然とその様子を眺める。嫉妬は愛の裏返しだと、小説では言っていた。愛とは、本当はこれくらい人間離れた、化物の所業なのかもしれない。その時少女が一際高い悲鳴を上げ、嗚咽の間に少年の名を呼んだ。母親は個室の中に半身を突っ込んでいた。今にも少女を絞め殺しそうな勢いだ。少年は決死の覚悟で個室の前に進み出ると、女の胴体のまだ外にぶら下がっている部分を掴んで思い切り引きずり降ろそうとした。女は低い唸り声をあげた。

「何すんだ、手を離しな……。ふん、大方お前も史媛に誑かされたんだろ。これは、親子の問題なんだよ！あの人を、愛しているから！」

少年は言えなかった。それは愛ではないと。愛の最たる形とはこういうものなのかもしれない。わからないのだ。

女は少年に掴みかかり、その体もろとも手洗い場の鏡に激突した。少年は思い切り鏡に拳を叩きつけた。破片が飛び散り、そのうちのひとつが女の腹に突き刺さる。薄れゆく意識の中、少年は鏡の中にいつかの絵の女と怒り狂う獅子を見た。泣き声はいつの間にか止んでいた。

知らぬ間に眠っていたのだろうか。少年が目を覚ましたとき、目の前の画用紙には咆哮を

あげる獅子を描かれていた。画用紙を押しつけて携帯電話を掴み、慌てて史媛の番号にかけると繋がない。いらいらと歯ざしりをしながら、画用紙に「獅子の心臓」と題名を書き入れた。こんな時まで絵のことを気にする自分に嫌気がさして、汚れた布団に座り込む。画用紙をくしゃくしゃに丸めて投げ捨てると、おとなしくゴミ箱におさまった。

それから何時間待っても史媛からは何の音沙汰もなかった。一日経ち、三日経ち、一週間経ち、十日が過ぎた頃、少年の携帯電話に着信通知が来ていた。今頃になって何故、と訝しく思いながらもかけ直す。

「こんにちは。史媛の母の美沙子と言います。あなたが……。いえ、史媛はいつもあなたの話ばかりしていましたから。」

何故過去形なのか。彼女の身に何か起こったのだろうか。

「何かあったのですか？」

「史媛は自殺しました。一週間前に、川の上にかかった橋から飛び降りて。」

「自殺？いや、そんなはずは。何故……？」

「……そう、あなたにもわからないのね。私もあの子が何故急に死んだりしたのか、一向にわからないの。どうしてなの、どうして、」

「……」

「再婚だつて喜んでくれて、新しい学校も楽しみをしていたのに。」

「……史媛さんの、義理のお父さんは、」

「はい？ごめんなさい、聞こえなかったわ。」

「……いえ、何でもないです。」

「そう。取り乱してしまつてごめんなさい。迷惑だつたでしょう。もう切るわね。お元気で。娘と仲良くして下さつてありがとう。」

死んだように静まった受話器を掴んだまま、少年はそこから動くことが出来なかった。

何もかも突然すぎて、思考することも出来ない。彼の心はあまりにも空虚だった。事実として告げられたことを認めたくなかったからかもしれない。

少年は、心を無にして頭だけを動かそうと試みた。今の母親は、どう考えてもあの般若のような女ではなかった。何の変哲もない、普通の、娘を愛する母親だった。少年は、自分が自分自身で思っていた以上に無力であることを痛感せざるを得なかった。

全て何かの魔法が創り出した幻だと思いたい。しかし目に見えるもの、耳に聞こえるものを頼りに生きている以上、彼には受け入れる道しか残されていなかった。確かなのは、もう史媛とは会えないということ。触れることも出来なければ言葉を交わすことも出来ないということ。冷たい剣が少年の心を貫き、立ち尽くした胸からは透明な血が止めどなく流れていた。

翌日、少年は久しぶりにおばさんを訪ねた。会って早々仕事帰りの彼女に翔って誰、と聞いたらとても驚かれたけれど。翔は少年の父らしい。どうして知っているかは聞かれなかつ

た。絵で賞をとったことを告げると、少女のように全力で喜んでくれた。子供かよ、思わず呟いた少年に、おばさんは言った。私は万年乙女だからね、と。少年は久しぶりに声をあげて笑いながら、彼女こそが母だと思ったのだった。

そして今。朝の電車の中で、少年は写真を握り締めている。史媛のあの悪戯っぽい笑顔を思い出しながら。ああ憎いほど愛おしい人よ。君のおかげで僕は今、初めて自分を信じられる。妄想だったと思っていた、あの電流がもたらす衝動も。でも君も大概だよ。妄言を吐いて、命を捨ててまで。今ではもうあの、心のうちのどれほどが含まれているかも知れないよ。うな詩だけが、君がいた証になってしまったじゃないか。

しかし君は賭けに勝った。確かに僕らは会えなかったけれど、僕は確かに君を助けに行つた。その結果、今こうして君の文字が見える。君が僕らに重ねた景色が見える。僕らは今、こんなにも近くにいるんだ。

何の電流も感じなかったが、少年は美術室まで必死で走った。少し涼しくなった風に、髪が踊っている。画材を挿んで、勢い良く描き始めた。美術の教師が、芸術家だねえと言つて笑つた。始業の予鈴が聞こえても、少年は描くのをやめなかった。学校中の生徒が席に着いて辺りが静まり返った頃、ようやく顔を上げた。目の前では、一面の青い景色の中で一体の獅子が咆哮をあげている。乾くまでしばらく待たなくては、と袖で汗を拭いた。

追記。絵が仕上がったら、裏には詩を書くよ。君の詩を読んで泣いたことは、恥ずかしいから内緒。そうだな、ずっと悪役だった僕をヒーローにしてくれたこと、すごく嬉しかったから、そのことでも書こうか。